

第53回毎日出版文化賞受賞！

《動物系統分類学》完結は どのように報道・紹介されたか

中山書店

この小冊子は、地球上に生息する原生動物から哺乳類までの全動物群を精緻なイラストで網羅し、38年の歳月をかけて世界で初めて完結した《動物系統分類学》(全10巻24冊)をめぐる新聞・雑誌の紹介記事をそれぞれの発行元の諒解のもとに再録したものです。

戦後より、優れた出版物を顕彰する制度として最も権威と伝統のある毎日新聞社主催の第53回毎日出版文化賞・自然科学部門本賞をこの《動物系統分類学》が受賞いたしました。

生物多様性の問題が大きくクローズ・アップされている昨今、この機会に学校・研究所・公共図書館などに幅広く普及することを心から希っております。

第2部は、完結の機に、中山科学振興財団が第8回中山賞のテーマとして設定した「動物の系統と分類」で大賞を受賞された青木淳一(横浜国立大学教授)先生による「ダニと環境評価」の演題で、贈呈式(1999年9月23日)当日に神楽坂・日本出版クラブ会館で行われた記念講演を掲載しました。

中山書店

第 1 部

《動物系統分類学》(全 10 卷 24 冊)

完結をめぐる 新聞・雑誌の紹介記事一覧

6月1日	日本経済新聞 (夕刊)	2
6月7日	読売新聞 (夕刊)	3
6月18日	朝日新聞 (夕刊)	4
7月13日	東京新聞 (夕刊)	5
9月7日	毎日新聞 (夕刊)	6,7
6月5日	サイアス7月号	8,9

中山書店の
動物研究書

38年ぶりに完結

原稿遅れ、執筆者様変わり

アメーバなど原生動物からほ乳類まで、すべての動物群を網羅的に解説する中山書店の「動物系統分類学」(全十巻、二十四冊)が今月末、完結する。

第一回配本から数えてなんと三十八年。執筆者九十九六一年に最初の巻が出た。当初は五十七年で完結の予定だったが、依頼した原稿が思うように集まらず、七四年から八六年まで刊行が中断。一時は「完結しないのでは」という憶測も流れた。学会の世代交代もあり、執筆者の変更など

で時間がかかった。セット定価は七十三円四千五百円。分売もある。B5判で一冊平均三百五十ページ。精密な形態図を多く収め、生態、行動、発生の仕組みなども説明している。分子進化学の新しい成果を入れた追補も今後加える。

全動物群を網羅する出版の計画はドイツ・フランクフルトから、原稿を二から書き直した米國にもあるが、いずれも未完のまま。平田直・中山書店社長(右)は「印刷の究の基盤を提供できる」と直前までいったのに気に入らなうの荷を下ろした表情。

地球の動物群すべて網羅

24冊シリーズ専門書、38年かけ完結

71 執筆者 25人すでに他界

アトリーなどの原動物から霊長類まで、地球上のすべての動物群を網羅した専門書「動物系統分類学」(中山書店)の全二十四冊シリーズが、著者上旬の最終配本で、三十八年かけ完結することになった。関係者にまで、「系統分類の集大成が完成したのは世界で初めて」といふ。



全24冊に及ぶ「動物系統分類学」を平田書店の平田社長。38年の歳月を費やして来月、ついに完結する。

「ようやく肩の荷が下りた」。監修の山田真言・北海道大学名誉教授(76)はいふ。初刊の配本は一九六一年。当時、日本動物分類学会会長だった内田亨・北海道大学名誉教授(故人)が「分類学は生物学の基礎。日本で決定版をつくりたい」と、中山書店創設者の中山三郎氏(同)に持ちかけ、同名教授の監修で全十六冊シリーズの刊行が決まった。

各分野の専門家に執筆依頼を出し、年一、二冊のペースで配本する計画だったが、執筆者としても時間と努力を要する仕事だけに、原稿がなかなか集まらない。七四年以降は、一冊も配本できない状況が二年も続いた。しかも、その

間の新発見などを盛り込んだため、予定の十六冊は二十四冊に膨らんだ。八一年には内田名誉教授が亡くなり、弟子の山田名誉教授が監修を引き継いだ。しかし、三十八年は長かった。執筆

者七十一人のうち二十五人が他界。原稿に納得せず、オーケを出さないまま死去した執筆者もいる。四八年創立の中山書店は生物、医学専門書出版の老舗。中山社長は「自分の命が消えるのが先か、本の完結が先か」と執念を燃やしていたが、九五年に亡くなった。現社長の平田直喜

さん(51)にとっても「七〇年に入社早々、担当したといふ困難の出版物だった。執筆陣も感慨深そう。元日本動物分類学会会長・朝比奈止面氏(85)は「執筆も可能。問い合わせは中山書店(03・3813・1100)へ」。

み込み、外国でも確認行った。だれでも多く書けるわけではない」といふ。価格は全巻で七十五円千五百円。一冊ずつの購入も可能。問い合わせは中山書店(03・3813・1100)へ。

全動物網羅の「動物系統分類学」

意地と誇りで38年

地球上に生ずるすべての動物群を網羅した「動物系統分類学」(全十巻)が七月中旬二十四冊をもって完結する。一九六一年の第一回配本から、三十八年。出版社の中山書店(東京都文京区、平田直社長)は数冊に上る赤字を出しながら、学術出版社の意地と誇りで、発行してきた。

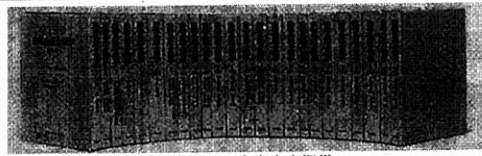
赤字を覚悟で24冊刊行



故中山社長

「動物を調べるべきに本」
 当は採りつものほの本じ
 か。平田社長は「
 日判、金巻で約八千五
 頁の「分類学」のほ
 えて脚を張る。請家の少
 ない分野もあり、全動物群
 を網羅することは大冒険
 難を伴った。欧米の動物書
 はあつたが、いずれも未だ
 ない。」「分類学」は、書家が
 参照できる水準を保ち、ア

メハなどの単細胞動物から
 豊富な形質で分類せられ
 むれなく収録した。一巻刷
 りだが、精微なデザインや
 解剖図を豊富に盛り込ん
 だ。執筆者は計七十一人。
 そのうち二十五人がすでに
 他界している。
 発行のきっかけは、一九
 五八年の「さかひのほ」。
 最初の発行者の内田守、北
 海道大を専攻教授と、同書
 店の創業者、中山三郎平社
 長の当時が「動物学の基
 礎になるいい本を作らう」と
 話し合ひ、六二年十一月



「動物系統分類学」全24冊—中山書店提供

に刊行を始めた。
 当時、占版印刷の時代。
 一つの本の完成前に執筆
 者から「リターンが正確で
 ない」と指摘され、無難の
 原稿から作り直すこともし
 ばしはあったという。だが
 て原稿の集まりが悪くな
 り、十七冊を出した七四
 年から約十二年間、刊行が
 中断。八年、内田さんが
 八十四歳で亡くなった。
 八六年に刊行を再開した
 が、再び上は激減した。
 中断前は各巻十数部売れ
 たが、再開後は採算ライン
 の七部を売った。最後の
 三冊はそれぞれ二百部にも
 満たない。赤字は累積で数
 億円にのぼった。年商
 十三億円の中山書店にと
 っては大きな負担だ。

それでも刊行を継続させ
 た原動力は、中山さんの執
 念だった。「学術出版で
 は、売れ行きを採算がどう
 であれ、一巻世に出して
 た企画は安易に撤退しては
 ならない。裏切りの本は結
 果として必ず報われる」と
 口癖のように語り、打ち合
 わせには必ず同席した。中
 山さんは八九年に社長を退
 き、九五年五月、完結を待
 たず八十四歳で死去した。
 内田さんの弟子二人目
 の監修者、山田喜昌・北海
 道大を専攻教授と、数年前、ロンドンの大英自然史
 博物館で「分類学」を見つ
 けた。英国人の知人は「す
 ぐらに利用しなくては、貴重
 な本は収蔵するものだ」と
 断絶したという。山田さん
 は一発結が、日本の系統分
 類の若い研究者を助すこと
 とにたなははすと「意味。
 」と七十二万四千五百円。
 同社はDNA解析を用いた
 分子系統学の成果を、最新
 の動向を収めた増補版を
 年内に出版する予定だ。
 日本動物分類学会理事長
 の青木淳一・横浜国立大学
 教授(土佐動物学)の証言
 なく日本でこれだけ東西家
 を集めたものは、現時点で、
 最も最大の知識を盛り込
 んでいる。生物系統性に
 関心が高まっているいま、
 発行し続けた意義は大変
 大きい。

原生动物からほ乳類まで、すべての動物を分類・解説した「動物系統分類学」全二十四冊が、一九六一年の第一回配本から三十八年ぶりに完結した。地球上の全動物群を網羅した分類学の書物は国内では初め。当初から刊行に携わり、八〇年代からは監修を務めた山田真吾・北海道大学名誉教授に、刊行の苦労や分類学の現状などを聞いた。

全動物網羅の全集完結 山田真吾北大名誉教授に聞く

(永井 理)

—三十八年がかりの完結を迎えた感想は

ホッとしました。私の恩師で初代監修者の内田亨さん(北海道大学名誉教授)が提案して始まった計画でしたが、あと七冊を残したところで亡くなり、私が監修を引き継ぎました。当初から手伝わせてもらっていたので感慨深いですね。執筆の中には、多忙で結局書けずじまいの人や、一部原稿を直してもらった方もありますが、ただ書いて亡くなった方もありません。

38年かけ地味な種にも光

—「こういう本が無かったのはどうしてでしょう」

鳥、チョウ、貝など、個別分野の本はあります。しかし、地味で目につかない動物グループを除かず取り上げる「こういう本は執筆も少なく、資金的にも大変です。欧米でも同様の書物が刊行されていますが、完結していません。——いつも苦勞でした。——



やまだ・まゆみ 1923年東京生まれ。45年、北海道大学理学部卒。54年、同大助教授。62年、教授。85年から93年まで京理科大学教授。専門はヒドロ虫類の系統分類学。

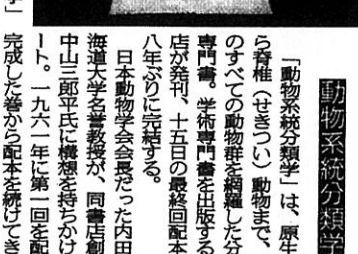
が就き、戦後は分類学の講座が減ってしまいました。教授の定員が増えないのだから仕方ないですが。それに、日本では標本をきちんと整理して残していく仕事はまだありません。イギリスなどは非常に進んでいるんですが……。

た学問なのでしょうか

内田先生は日本動物学会や動物分類学会の会長を務めたホスピタリティな人で、私からすれば、当初からの執筆は、先生に当たる大先輩ばかり。監修者として原稿を直してもらったのは気が使いました。

執筆は、先生に当たる大先輩ばかり。監修者として原稿を直してもらったのは気が使いました。

—執筆はすべてに可及な力をつけてもらえたか



完了した「動物系統分類学」

深海にも動物はいますか

「動物系統分類学」は、原生动物から脊椎(せきつい)動物まで、地球上のすべての動物群を網羅した分類学の断片期間もあり、三十八年がかりとなった。三十八年の間には、七十一人の執筆者のうち、内田名誉教授を含め三分の一人以上が亡くなった。同書店では「形勢的な分類学だけではなく、各動物の生態や分布、絶滅種なども詳しく説明しているのが特徴」としている。二十四冊セットで七十五万四千五百円。分売も可能。

特集 ワイド2

動物を第一に考えました。

—本の意義は？—

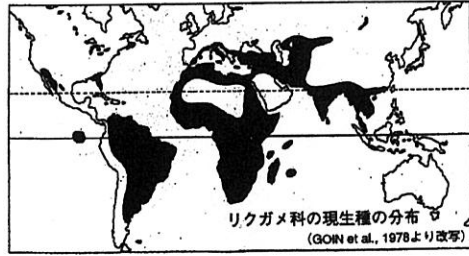
◆例えば、海岸の動物の図鑑には、クラゲも何種類かは出ています。しかし、全体図と名前が書いてあるだけで、それ以上のことは書いていない。この本には、全種類とその形態、体中の構造、生態や行動、分布、研究史、分類といった内容までが盛り込まれているのです。日本語で入手できるかなりの知識を得られるでしょう。

—監修する上で気を使ったところは？—

◆節足動物の中の昆虫については、3冊を費やしました。動物界に

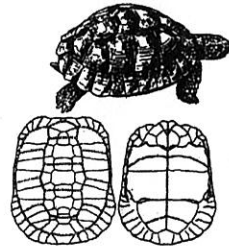
動物系統分類

2代目監修者 山田真弓



分かりません。植物は光合成に光

リクガメ科の現生種の分布 (GOIN et al., 1978より改訂)



のです。人間が環境を悪化させているから減少していると言えなくもありませんが、それはほんの一部。普通の地球上の生活になじめなくなっている側面もあります。それ

は虫類のリクガメ科ギリシアリクガメの場合、全身像だけでなく背甲や腹甲の図、さらには世界的分布まで紹介されている

た。

を輸入しました。しかし、その基礎の部分で、十分入って来なかったところもあるのではなからうか。例えば、ロンドンの大英博物館では、ナチュラリヒストリー(自然史)の建物が独立しており、膨大な動物や植物の標本、鉱石、化石が収められています。広大な植民地で勝手なことをやって来たので、どうもあついでに、あついでに、あついでに保存しようとしてきたことは偉大だと思います。日本も他のアジアの国々と協力して、このようにすることができないうちから、生物の多様性を維持することの重要性も指摘されています。この本の完結がひとつのきっかけになしてほしい。

中山書店社長

平田直氏

中山書店の平田直社長も、創業者で発行者の中山三郎平社長が1965年に亡くなった後、この大事業を引き継ぎ、巨額の赤字を出

しながらも、完結させた。「企業が単独でやるには大変な事業だったが、完成すれば若い研究者の励みになり、世界で初めてのものになるのは間違いない」といって、いよいよ「やりあげた」と振り返る。

専門家に執筆依頼を重ねる過

「すべて人間と対等」

では監修対象であっても分類することはない。反面、貝合わせなど考

「このような本は、すべての種が人間と対等だ」という意識を持たないと作ることができません。地球上で人間がふんぞりかえっているのがいいのか、を改めて考えさせられました」

一本の木の幹からいくつもの枝が分かれたような動物系統図。アメリカのような哺乳動物から霊長類などの哺乳類まで、系統図の端から端まですべての動物群を網羅した「動物系統分類学」(中山書店全10巻4冊が7月に完結。23日には記念パーティーを開く。世界初、38年がかりには驚いた。そこで、発刊当初から刊行にかかり、亡くなった恩師の後を継ぎ、代目の監修者として完結させた山田真弓・北大名誉教授にお会いした。

【山田 真弓】

☆100万〜120万種の…
——動物系統分類学とはどのような学問ですか?
◆下等な動物からたんだん高等な動物が出現したという考え方を基にして、いろいろな動物とどういふ動物が近縁であるかとか、あるいは逆に祖先から遠いかを議論する。これを系統と言いますが、系統を頭に入れて、地球上のさまざまな動物を分類する学問です。ただ、化石の知識は非常に限られているので、本では現在生きている

学全10巻完結

北大名誉教授に意義を聞く



やまだ・まゆみ 1923年東京都生まれ。45年北海道大学理学部卒。同大の助教授を歴任。トド門は腔腸動物の一種、昭和天虫と口虫の系統分類学。ヒドロ虫類に関する遺稿を書籍にまとめた。

38年がかり

は100万から120万の種があるといわれていますが、昆虫はその半分以上を占めます。専門家がたぐさなくて、人類が大変だったようです。また、せうが、日本人が日本を出す本なので、日本に生息するもの下注目して詳しく書き

が必要なので深海にはすみませんが、動物は水深1万メートルでも生きることが出来ます。最近、採取技術が進んでいます。

——地球環境の変化は動物系統分類学から分かるのでしょうか?
◆環境がどう変わったから絶滅しかかっているという研究はあります。でも「環境を保護しよう」というのも、現実にとの程度分布しているのか、近縁種があるのかどうかを分らないと、具体的に対応して行くのではないですか。この意味で、ある一定時点での実態を残しておくことは非常に重要なことです。

——ここ100年ぐらいで急激に減った動物はありますか?
◆シヤミヤンガイという触手動物は100年以上前には日本にたくさんいました。最近では非常に少なくなっています。ナメクシオという原素動物も、世界中で非常に減少しています。

てもらったり、クミンチの味に日本でよく研究されているのを加味しました。

☆環境変化と激減

——今後、系統図に新たな動物が加わる可能性はあるのですか?
◆深い海から何が出てくるか

を議論するために、動物の実態をはっきりさせることには話になりません。

☆DNAと形態の差

——DNAによる研究は動物系統分類学に影響を与えますか?
◆特にここ10年、分子生物学的な研究が進んできました。しかしDNAを基にした研究結果が、すべての動物の系統分類に利用できるわけではないう。DNAに基いてこれとこれとは近いとかが研究するにしても、形態上の特徴を明らかにすることも必要です。例えば、軟体動物員(イナゴ)、環形動物(ミミズ)など、節足動物のミミズがどのような関係にあるかは昔から問題になっていますが、DNAレベルでは差がほとんどないということがあります。その場合、形態は重要です。この本は学問上の中心のコミュニケーション。これを基に新たに研究が進展して行くのを期待します。

☆多様性の維持を「

——38年間を経て何を感じますか?
◆日本は明治時代、外国の学問

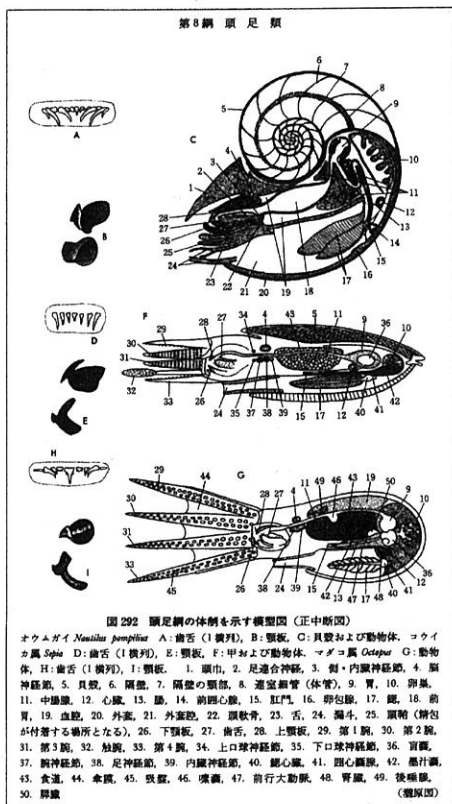


図 292 頭足綱の体制を示す模型図 (正中断面)

ナウミガイ *Nautilus pompilius* A: 歯舌 (1 横列), B: 顎板, C: 貝殻および動物体, コウイカ属 *Sepia* D: 歯舌 (1 横列), E: 顎板, F: 甲および動物体, マダコ属 *Octopus* G: 動物体, H: 歯舌 (1 横列), I: 顎板. 1. 頭巾, 2. 足適合神経, 3. 刺・内臓神経, 4. 脳神経, 5. 貝殻, 6. 隔壁, 7. 隔壁の頸部, 8. 適室細管 (体管), 9. 胃, 10. 肺, 11. 中腸, 12. 心臓, 13. 肺, 14. 前腸心臓, 15. 肛門, 16. 卵包, 17. 腸, 18. 前胃, 19. 魚鱗, 20. 外套, 21. 外套腔, 22. 腹水管, 23. 舌, 24. 歯舌, 25. 唇袋 (唇袋が付着する場所となる), 26. 下顎板, 27. 歯舌, 28. 上顎板, 29. 第 1 腕, 30. 第 2 腕, 31. 第 3 腕, 32. 触腕, 33. 第 4 腕, 34. 上口球神経, 35. 下口球神経, 36. 盲腸, 37. 脳神経, 38. 足神経, 39. 内臓神経, 40. 腸心臓, 41. 腸心臓, 42. 墨汁腺, 43. 食道, 44. 本腕, 45. 腹筋, 46. 噴管, 47. 前行動脈, 48. 腎臓, 49. 後腸腺, 50. 脚腺 (腹原図)

●この1月に出た第5巻上「軟体動物 I」から、頭足類

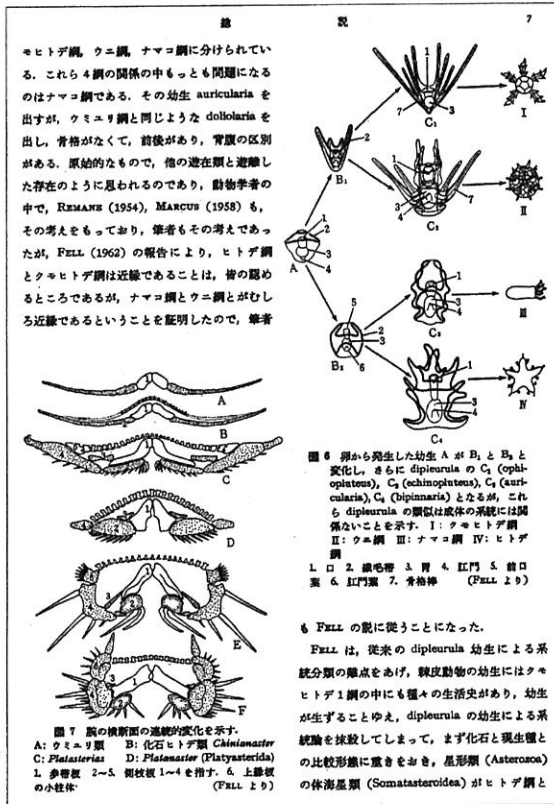
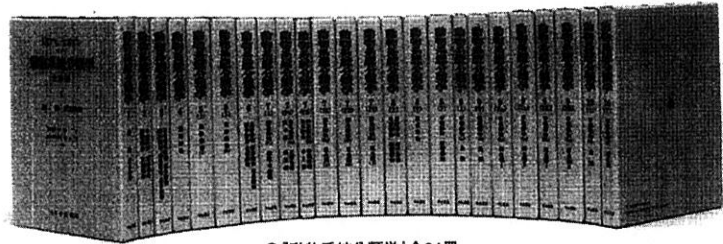


図 7 頭足の横断面の進化的変遷を示す

A: クミナリ頭 B: 化石ヒトデ類 *Chiniastrea* C: *Platystrophia* D: *Platystrophia* (Platystrophia) 1. 歩脚 2-5. 脚枝 1-4 を指す, 6. 上肢枝の小枝体 (FELL より)

●第8巻中「棘皮動物」から



●「動物系統分類学」全24冊

ちなみに、本編全24冊のセット価格は72万4500円。中には200部弱しか製作していない巻もある。「図書類などで常備してもらえれば」と、平田さんは話している。

編集部 木元俊宏

中には未完のまま筆者が亡くなり、若手にバトンタッチされた巻もある。執筆陣を率いてきた内田氏自身も、81年に亡くなっている。「亡くなられる直前まで、このシリーズのことを気にされておられました」

その後、監修は山田真弓・北海道大学名誉教授が引き継いで

現在に至っている。かかわった歴代の編集者も十数人。和名の統一など、苦勞がいろいろあったという。とくに標本の構造をはっきり示すため、図版はひとつひとつ画家に描き起こしてもらった。そのコストも莫大だったそうだ。

ちなみに、スタート時に既にあつた独仏米などの同様の出版事業は、まだ完結していないという。本シリーズは6月に出る第5巻下「軟体動物II」をもって大団円を迎えるわけだが、実はまだ仕事は今世紀いっぱい続く。深海探査で発見されたハオリムシ(チューブワーム)など新たに記載すべき動物や、DNA構造に基づく分子系統学の進歩などを載せた「追補版」を、この10月に出すのがひとつ。また、別巻として「総索引/総目次」が、2000年10月に刊行される予定だ。

【科学書出版】

38年がかりの出版が大詰めに 『動物系統分類学』全24冊

1961年に始まった大型シリーズの刊行が今月末完結する。
版元の中山書店(本社・東京)に話をうかがった。

38年がかりの出版事業が、この6月30日の配本で本編部分の完結を迎える。「動物系統分類学」全10巻24冊である。

やり逃げしたのは、医学書などの出版で知られる東京の中堅専門書出版社中山書店(平田直社長)。

国や大学の事業ではなく、研究者らと出版社が主体となって進めたという点でも、まれに見る仕事である。

また、延べ98人の執筆者のうちで、今も健在なのは47人。まさに今世紀後半を歩み抜いた大事業だった。

延びに延びた 刊行計画

同社がこのシリーズの刊行を始めたのは、1961年11月。

当時、日本動物学会会頭であった内田亨・北海道大学名誉教授が会頭をとり、同社の先代社長中山三郎氏と語り、刊

行が始まった。

動物を分類して記載する、という重要ながら地味でもある、いわば学問の世界のインフラづくりであった。

「日本でこの分野では、戦前に4巻本の刊行が企画された例があるのですが、戦争もあり1冊が出ただけで中断していました。そこで内田先生は、キチッとした日本版動物分類学の決定版をつくりたい、と考えられたそうです」

と、平田さん。

最初に完成し配本されたのは、第2巻の「中生・海綿・腔腸・有櫛動物」。当初の計画では、これを皮切りに全10巻16冊を出して終了する予定だった。

しかし、初めは年に1〜3冊のペースで刊行が進んでいたが、やがて転機が訪れる。「学説にも進歩・変化があり、なかなか執筆者が手離れしない巻が出てきたのです」と、現在の担当編集者の中で

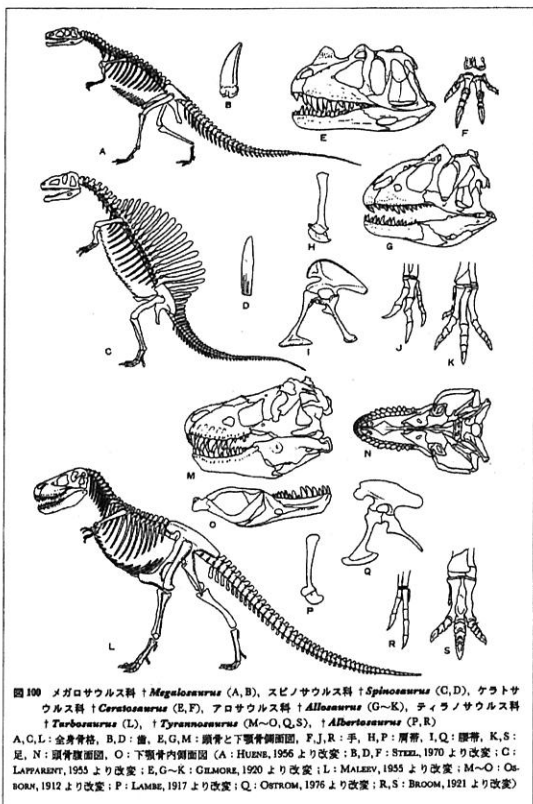


図100 メガロサウルス科†*Megalosaurus* (A, B)、スピノサウルス科†*Spinosaurus* (C, D)、ケラトサウルス科†*Ceratosaurus* (E, F)、アロサウルス科†*Allosaurus* (G-K)、ティラノサウルス科†*Tyrannosaurus* (L)、†*Tyrannosaurus* (M-O, Q, S)、†*Albertosaurus* (P, R)
A, C, E: 全身骨格, B, D: 歯, E, G, M: 頭骨と下顎骨側面図, F, J, R: 手, H, P: 肩胛, I, Q: 膝骨, K, S: 尾, N: 頭骨腹面図, O: 下顎骨内側面図 (A: HUENE, 1906より改変; B, D, F: STEEL, 1970より改変; C: LAPARENT, 1955より改変; E, G-K: GILMORE, 1920より改変; L: MALEV, 1955より改変; M-O: OSBORN, 1912より改変; P: LAMBE, 1917より改変; Q: OSTRÖM, 1976より改変; R, S: BROOM, 1921より改変)

●第9巻下B2「脊椎動物Ⅱ 爬虫類Ⅱ」から、メガロサウルスなど恐竜

最も長いキャリアのある小此木

民江さんは振り返る。

「著者から原稿をひたたくるようにならして持ち帰り、版を組んで校正刷りを出した時点で、「やはりまだ納得のいくものではない」とのお話でいったん中止し

たこともありました」

原稿が集まった巻から刊行を

進めていったが、諸般の事情から、ペースを守るのが難しくなっていた。とくに大きかった中断は、75年から85年にかけて。この間は

1冊も出なかった。化石動物は

原則として扱わないという方針を変更し、両生類、爬虫類、軟体動物などで化石動物についても触れるようにしたことも大きい。また、冊数もそれに伴い増



第2部

第8回中山科学振興財団
大賞受賞記念講演

ダニと環境評価

—ササラダニと共に40年余

青木 淳一

横浜国立大学教授

司会（平田） お待たせいたしました。それでは、ただいまから中山科学振興財団第8回中山賞「動物の系統と分類」のテーマに基づく大賞受賞記念講演を開演いたします。開演に先立ちまして、大賞を受賞なさいました演者の青木淳一先生をご紹介します。

青木先生は、1935年6月19日のお生まれです。1958年3月、東京大学農学部農学科をご卒業後、1963年3月、東京大学大学院生物系研究科博士課程修了。1964年4月よりハワイビショップ博物館昆虫研究部研究員。1965年2月より国立科学博物館動物研究部研究官。1975年4月より横浜国立大学環境科学研究センター助教授を経て、1977年4月より現職でもあります横浜国立大学環境科学研究センター教授でございます。94年の4月から96年3月まで、横浜国立大学環境科学研究センター長を務めておられます。

ご専門は、動物分類学。特にササラダニ類の分類学的研究です。

青木先生は、平成10年度日本動物学会賞を受賞しております。それでは、大賞受賞記念講演、青木先生、よろしくお願いいたします。



中山賞大賞受賞記念講演

ダニと環境評価

—ササラダニと共に 40 年余

青木 淳一

横浜国立大学教授

環境科学研究センター・土壌環境生物学

このたびは中山科学振興財団から大変映えある賞をいただきまして、光栄に存じております。この席でお話しさせていただくのは、私だけのようでございますので、受賞者全員を代表いたしまして、厚く御礼申し上げたいと思います。

先ほど日高選考委員長も、ちらっとおっしゃいましたけれども、生物の分類学という分野は非常に日の当たらない分野でございます。しかし、ある人が言ったように、分類学というのは生物学の中で最初に始まって最後に完成する学問である。また、建物を形づくる1つ1つのレンガであると同時に、そのレンガが組み合わさってできた殿堂そのものでもあるという言い方をする人がおります。私は分類学の中でも最も古い分類学をやっております、1700年代のリンネがやったような仕事を、そのまま今やっております。つまり、レンガを焼いている職人なのですね。今日、受賞された方の中には、そのレンガを組み立てる方もおられますし、いろいろ設計されて、殿堂をつくりかけている方もおられます。私は最も馬鹿みたいな作業というのですか、ただただダニの名づけ親のようなことをやってまいりました。その私が賞をいただけるなんてことは夢にも思っておりませんでした。我ながら驚いております。

ササラダニと共に 40 有余年

これから私のダニの話に移りますが、実はこんなことを申し上げてあれですが、一昨日私、腸閉塞になりまして、今、都内の病院に入院中であります。先ほどどうしてもこの授賞式に出たいからというので、院長を説き伏せまして、点滴を外してもらって、ここに立っているわけでございまして、話の途中でもし腹痛が起きましたら、失礼するかもしれませんので、あらかじめお許しいただきたいと思っております。

まず、ササラダニという名前をお聞きになったことがある方は余りおられないと思います。森の落ち葉の下に平和な暮らしをしている血を吸わないダニがいるということは、ほとんどの方がご存じないわけですね。よく初対面の方に「お仕事、何をなさっておられますか？」と聞かれて、「大学で教師をやっております」と言うと、必ず「ご専門は何ですか？」とくるわけですね。「動物学

です」と申し上げますと、そこで「はあ、そうですか」で終わらないですね。「動物と言ったって、熊や猿もあるし、魚や蟹もあるし、何をなさっているんですか?」と言うから、困ったな、これを言うと面倒なことになるんですが、しょうがないので「ダニです」とぶっきらぼうに言いますと、相手はポカンと人の顔を見つめていまして、「ダニって、人の血を吸う、嫌な生き物でしょう。何でもまたよりによって、そんなものを」という質問が必ず来るわけですね。その時に「私はあまのじゃくで、ひねくれ者で、人のやらないものを好き好んで、わざわざやるんですよ」と言うと、取材に来られたマスコミの方なんかは喜ぶわけですが、最近はそれを言わないようにしています。どう言うかという、「とにかく可愛いんです。こんな面白い生物が人知れず森の中に住んでいたというの、もう私にとっては素晴らしいことなんだ」ということを申し上げたんですね。

森の小人のササラダニ

ちょっと私は頭がおかしいのかもしれませんが、森の中を採取しながら歩いている時に、大木の根元とか、あるいは岩影から妖精が顔を出して、こっちをじっと見ているんですね。そういう妖精たちと私は、会話をしながら歩いているんですね。その妖精たちの一番仲良しが森の小人でありまして、その森の小人というのが、私にとっては落ち葉の下でひそやかに暮らしているササラダニですね。そのササラダニと私は、人知れず秘めやかなつき合いというか、そういうのを続けてまいりましたわけですが、最近はそういうものがあるんだということを、どうしてもしゃべりたくなくなってしまっ、皆さんにお知らせするようになった次第であります。

実は私は農学部におりましたから、そういう落ち葉の下のダニの分類学的研究などをやるのは、その当時の農学部では異端者でありまして、「おまえのやっている研究は、いったい日本の農業に、どう役に立つんだ」と随分教授たちから厭味を言われました。そんなわけで、大学院を出まして、ハワイのビショップ博物館、つづいて国立科学博物館に入りました時は、本当にうれしかったのです。分類学というものを大手を振って、堂々とやれるわけですね。ところが、何年かたったら、横浜国大に来ないかという誘いがありました。博物館のただの研究員を、いきなり大学教授にしてくれるというので、まあ普通の俗物なら喜んで行くわけで、私も俗物の一人ですから、喜んで飛んでいってしまいました。そうしたら、「環境科学研究センター」という看板がかかっているわけですね。そういうところでは、やはり環境科学をやらなければいけないので、私も仕方なしに授業では環境生物学という授業をやったり、あるいは神奈川県や横浜市の環境アセスメントの委員会の委員をやったり、表向き環境学者というような顔をして、世の中をだまししながら、ひそかに隠れて分類学をずうっと続けてやってまいりました。その結果、さっきご紹介がありましたとおり400種類ぐらいの新種を見つけて、名前をつけることになりました。哺乳類や鳥で新種が見つかる、テレビや新聞に出て大騒ぎになるわけです。ダニの新種などというのは、テレビに出ませんけれども、どんどん見つかったりしているわけでございます。

ササラダニという字は大変むずかしい字を書くのですが、竹の先を裂いたような髭(ささら)と

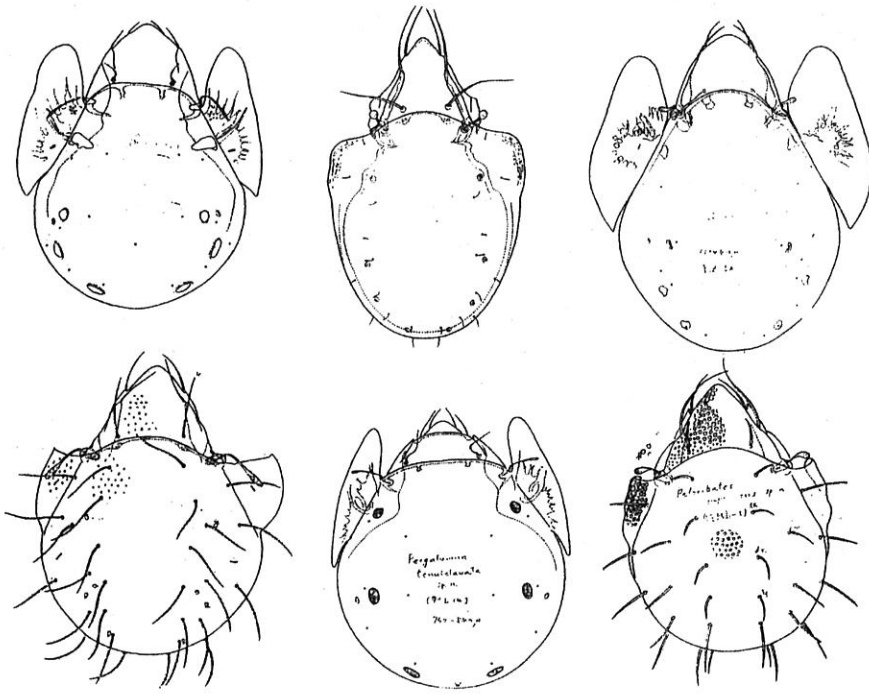


図1 ササラダニ類のいろいろ

いう道具がございますが、それに似たような器官が身体の両側にあるので、岸田久吉先生がササラダニという名前をつけたわけです。

これはダニだと言わないで、普通の人に見せたら、てんとう虫か何かのような可愛らしい虫だと思うでしょう(図1)。私だけが可愛いというのではなくて、本当に可愛いと思いませんか。ダニの仲間は7つの亜目に分かれますけれども、その中のササラダニというのは1つの亜目でございます。血を吸う嫌なダニ、あるいは植物の害虫のダニなどが混じっておりますけれども、ササラダニだけは非吸血性のダニでございます。

9割以上が自活性のダニ

それで、世界中の寄生性ダニと、いわゆる自活性のダニというのを比べてみましょう(図2)。今、世界中には約5万種類のダニがいる。日本には名前のついたダニが1,884種類いる。名前のついていないのを入れたら、3千になるか、1万になるか、5万になるかわかりません。

これを寄生性と自活性に分けてしまいますと、図2のようになりまして、ほとんどのダニが寄生性でないということが、おわかりだと思いますね。これは、名前のついたダニでこういう統計をとりました。寄生性のダニというのは日本のお医者さんたちが非常によく研究しておりますので、

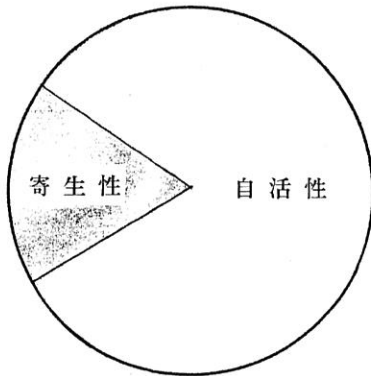


図2 寄生性のダニと自活性のダニの種類割合



図3 可愛いササラダニの一種、イレコダニ

ほとんど名前がついています。自活性のダニは名前がついているのは一部だけなので、もっともつと調べればその割合が、だんだん多くなると思います。私の推定では、約9割以上が自活性のダニであるというふうに考えております。

このササラダニの中で一番可愛いのは、団子三兄弟みたいですが、イレコダニというダニです(図3)。アルマジロのように足を引っ込めて、頭をパタンと閉めますと、団子になってしまうのです。これも、一見ミジンコのような形をしております、大変可愛いダニであります。

植物遺体の分解者

そのダニが、森の中で何をやっているのでしょうか。森の中には生産者として植物がありまして、枝・葉・花・実などを生産しますが、やがてこれらは枯れて地面に落下します。動物の遺体もどんどん降ってまいります。こういうのを生物遺体と呼んでおります。自然が出した廃棄物みたいなものです。そこに森の掃除屋さんというのがおりまして、地面の中の微生物と、それから土壌動物がこういう廃棄物を分解して、土に戻してくれるという作業をしております。

高校、中学の教科書では分解者というのは微生物を指します。いくら落ち葉を食べても、枯れ枝を食べても、動物は分解者であるといったら、試験で×になるんですね。これが非常に困ったことで、土壌動物は機械的分解、微生物は化学的分解を担当して、これはもう密接な切っても切れない関係にごさいます。例えば1枚の葉っぱが落ちてまいりますと、落ちたてはパリパリの硬い落ち葉ですが、雨に濡れますと、菌類やバクテリアが付着して、ちょうどキャベツを漬物にしたようにしなっとなつて、おいしくなります。そうしますと、土壌動物のダニなどがやってきまして食べます。お腹の中でかみ砕いて、大きな糞として出ますね。これはまた別のバクテリアがワー

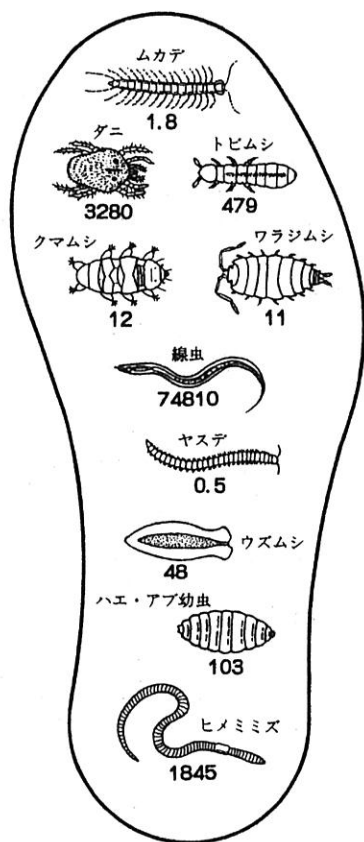


図4 森の中を一步あるくごとに踏んでいる
土壌動物の数 (ダニは3,000匹以上)

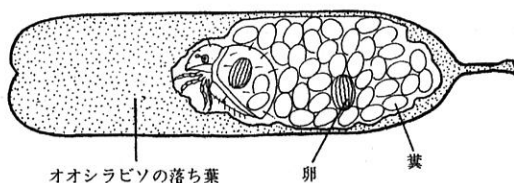


図5 オオシラビソの落ち葉の中身を食い進み、
糞を出しながら、その中に卵を産みつける
イレコダニ。

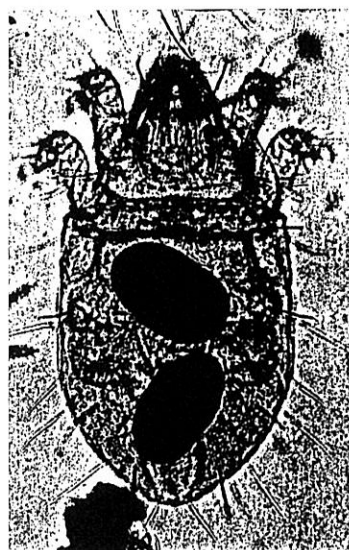


図6 フトツツハラダニの体内に見える
落ち葉のハンバーグ

ッと寄ってきて、分解します。表面積が何千倍にもなりますから、非常に分解の効率が高まるわけですね。このようにダニと微生物というのは、一致協力して1枚の落ち葉を分解しております。微生物は分解者だけれども、ダニは分解者でないというのは、授業でも非常に教えるにくいわけですね。ですから、広い意味で私はダニも含めた土壌動物を分解者というふうに呼んでおります。

たかがちっぽけなダニではないかと言いますが、実はその数たるや大変多くて、これは明治神宮で調べた例です。私ども論文では、1㎡あたり何匹と数えますけれども、ちょっと皆さんにはわかりにくいので、森の中を皆さんが歩いている時に、片足の靴でどのくらい踏んづけているかという面積に換算いたしました(図4)。そうするとダニが大体3,280匹。たった1歩の靴で、これだけのダニを踏んづけているわけです。そのくらいの数のダニが、全部ではありませんが、その8割くらいが落ち葉を食べて分解をしているということになります。

その証拠ですけれども、ササラダニのお腹の中にこういう落ち葉の団子が入っております。これ

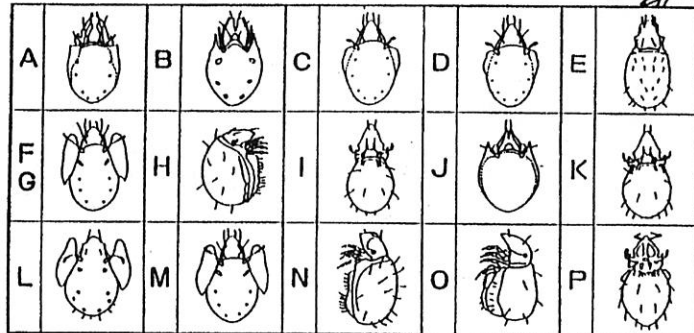
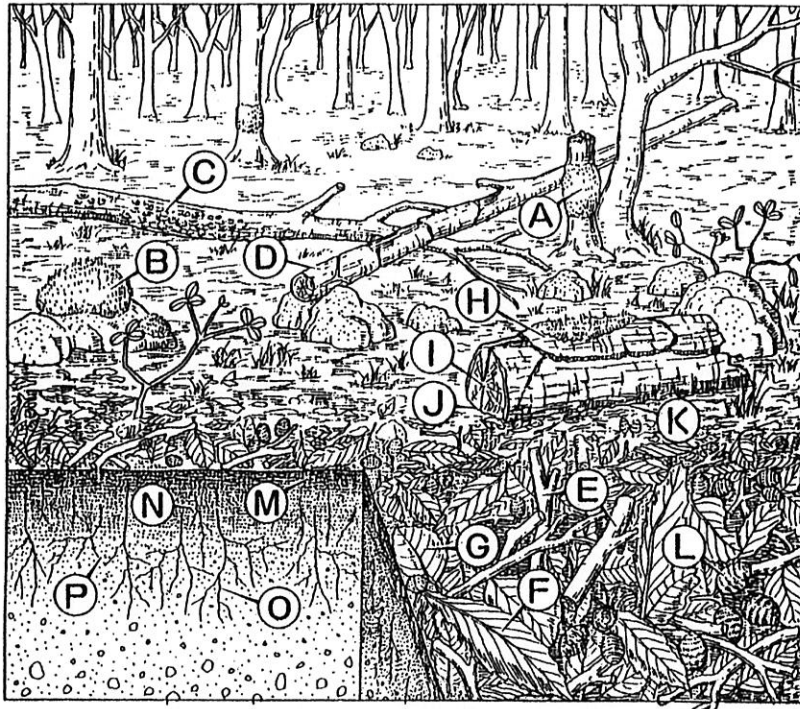


図7 林床や土壤中に存在するさまざまな植物遺体などの種類別のサンプリングと、それぞれの資料に最も多いササラダニの種類。群馬県榛名湖畔にて調査 (Aoki, 1967; 青木, 1971)

が、面白いことにどの種類でも、全部楕円形をしていますが、まん丸はないんですね。必ずハンバーグステーキの形をしていますので、私は「落ち葉のハンバーグ」と呼んでいます。例えば志賀高原のオオシラビソの落ち葉を針で壊したら、中からまるい粒がパラパラ出てきたわけですが、こんなふうにギッシリ、オオシラビソの落ち葉の中に親のダニが糞をしまっています (図5)。面白いことに、親がした糞粒の中にポツンと1つ卵を産みます。この卵は、親の出した柔らかい糞を食べて育って、葉っぱから出ていく。こういうことがわかったわけで、大変面白い発見でありました。



青木先生は専門書の他に一般啓蒙書もたくさん出しておられますが、主な著書を紹介いたします。

1. 「土壤動物学：分類、生態、環境との関係を中心に」、北隆館、1973年初版、第2版1980年。
2. 「日本産土壤動物：分類のための図解検索」、青木淳一、東海大学出版会、1999年。
3. 「大地のダニ」：共立出版、1976年、共立科学ブックス No. 32。
4. 「自然の診断役土ダニ」：日本放送出版協会、1983年、NHKブックス No. 438。
5. 「ダニにまつわる話」：筑摩書房、1996年、ちくまプリマーブックス 99。
6. 「日本列島ダニさがし：きみのそばにダニがいる」、ポプラ社、1996年、ポプラノンフィクションブックス No. 10。

【自己紹介】何でも皆が騒いでいることにそっぽを向いてしまう個性派。他の研究者が見向きもしない土壌中のダニの研究を始めたのも、そのせい。40年以上、あきもせず新種を見つけては記載し、命名する仕事を続けてきた。発見したダニの新種の数は約400種。この地球上から多くの種が絶滅していく今、多くのダニも人知れずこの世から姿を消しているだろうと思うと哀れである。「このような形をした種が、地球上に存在したのだ」という証拠を地球の戸籍簿に残しておいてやりたいという強い思いが、私を命名作業に駆り立てている原動力となっている。

さらに、もう少し証拠をお見せしますと、ササラダニのお腹の中に大きな落ち葉のハンバーグステーキが入っております（図6）。身体は小さいのですが、非常に大食漢でありまして、たくさんの落ち葉をバリバリかみ砕いて、たくさんの糞をいただきますので、その効果は大変大きいと思われております。

これは群馬県の榛名山の山の中で調査したのですが、林床を見ますと、いろいろなものが落ちております。落ち葉とか、枯れ枝とか、松ぼっくりとか、苔の腐ったのとか、そういうものを別々に、そおと拾い上げて集めてきまして、ダニ分離装置にかけますと、それぞれ違ったダニが出てまいりました（図7）。古新聞は私、空きびんは私、空き缶は私というふうに分別ゴミみたいに、それぞれの自然界が出したゴミを処理するゴミ処理人の担当が決まっているわけです。自然が出したものは残らず誰かが片づけてくれるというシステムになっております。ここに発泡スチロールを置いたり、ビニールを置くと、担当者がいないのでいつまでも残ってしまうのです。

現在 578 種

そういう働きをしているダニですけれども、人間の血を吸ったり、作物に害を与えたりいたしませんので、一般の方々も、研究者も、見向きもしなかったのです。したがって、ほとんど名前がついていない。私が卒業論文でササラダニの分類の論文を書きました時に、日本では7種類しかわかっていなかったのです。現在578種類です。私が長生きをして、新種を書きまくれば1,000種類ぐらいになるのじゃないかと思っております。その578種類のうちの385種類が、新種だったわけです。その385種類の新種のうちの285種類を私が名前をつけたということになります。そのために全国を歩き回りまして、2,900地点の場所で土をとってまいりました。お蔭様で、日本列島北から南まで全部走破いたしまして、観光地でないところにも、こんな素晴らしい自然があるの

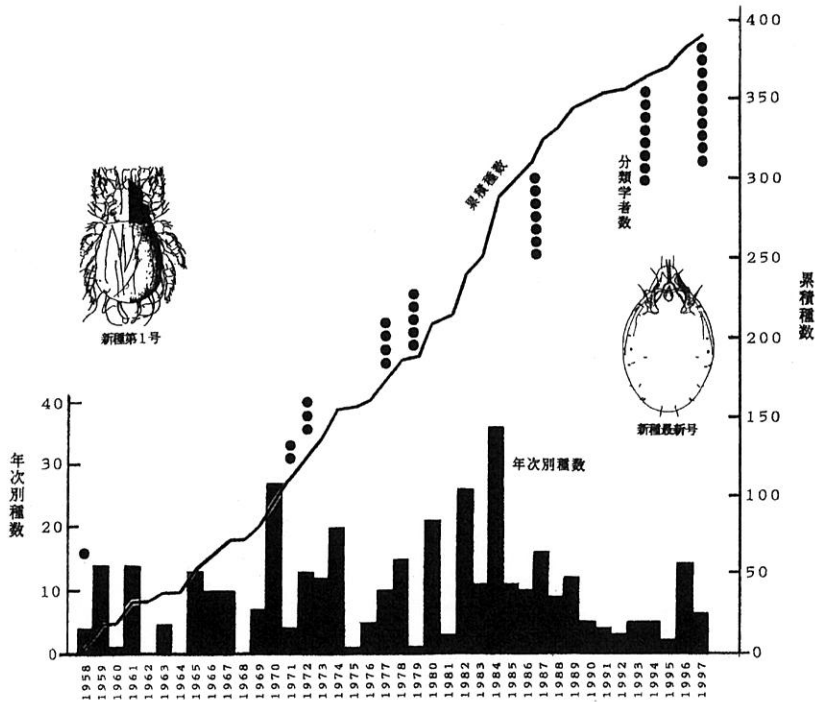


図8 新種として記載されたササラダニ類の種数
1997年までに計385種が記載され、新種以外のものも入れると578種となる。

だというところを何か所も見つけてまいりました。

調査に行くと、必ず自然林と人工林と雑木林と都市の植生と4か所をとることにしております。自然林を探すには、原生林の中に入ってももちろんいいのですが、町の近くですと、神社林にその土地の本来の自然植生が残っております。したがって、まず地図を広げまして、鳥居の記号のあるところへ車で走ってまいりますと、必ずいい森が残っていますね。そこで、落ち葉と土をとらしてもらおうので、ただ採っては申し訳ないので、5円か10円お賽銭を入れて、ついでに拝んでまいります。おそらく日本の神社をこれほどたくさん拝んだ人間はいないと思います。それにしても、余りご利益がないのですけれども、そうやって自然林から都市の中まで土をとってまいりました。

最初に卒論でダニの新種を記載しましたのは、1958年。これは毎年の新種を記載した数ですが、累計がこうなっております(図8)。この●は分類学者の数で、1970年までは私が1人で孤軍奮闘していきまして、1971年に1人弟子ができました。2人弟子ができました。今10人ぐらいでわっさか、わっさかやっていますが、このグラフが、どこまで伸びるかかわからないわけですね。おそらく先ほど申しましたとおり1,000種類ぐらいにはなるだろうと思われま。

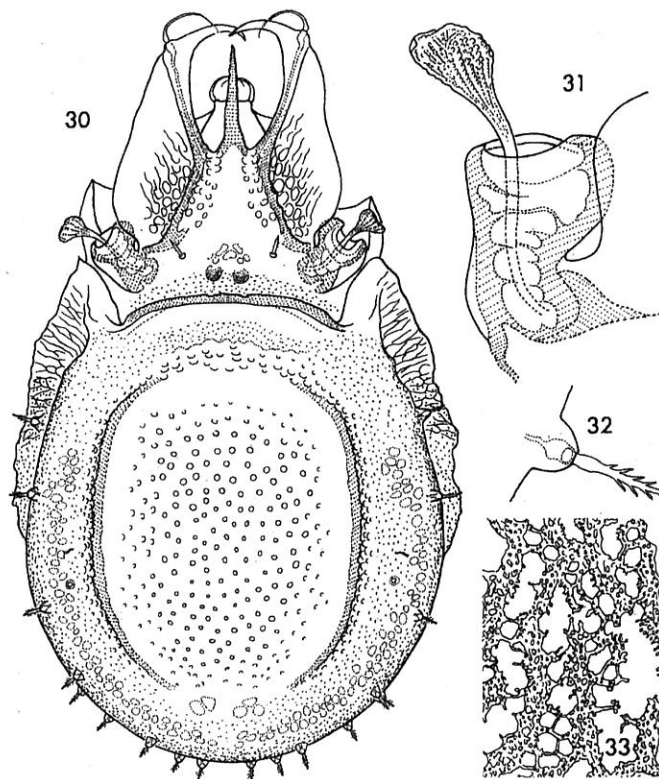


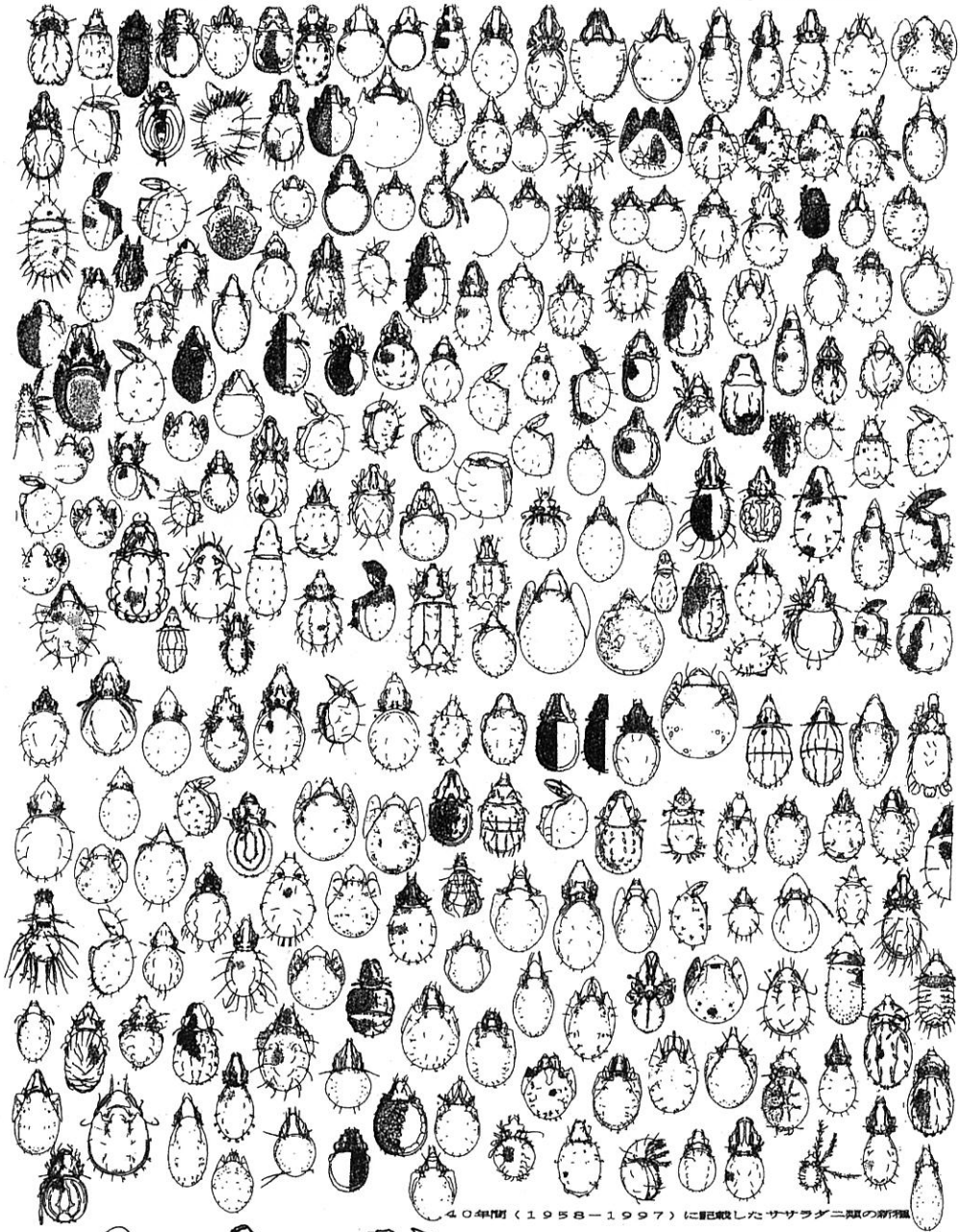
図9 みごとな突起や装飾をもったキバダニ（志賀高原で発見）

お気に入りのキバダニは志賀高原で

私の最も気に入っている種類はキバダニというダニです（図9）。これは志賀高原のオオシラビソ・コメツガの原生林の土壌の中から出てきたダニですが、非常に見事な彫刻模様とか、角、棘を持っておりまして、身体が硬いんですね。家ダニのようなプヨプヨして、全身に毛がはえたような嫌らしい形はしておりませんで、実に見事な形をしております。

ダニをどうやって採集するかと言いますと、とってきた土や苔を Tullgren 装置というものに入れて、上から電球で照らします。そうしますと、土や落ち葉が乾きますね。乾きますと、土壤試料の中のダニは全部下へ落ちてきて、ここを滑り台のように滑って、アルコールの中に落ち込んで、酔っぱらって幸せに死ぬという仕掛けになっているのです。これで自動的にたくさんダニがとれるわけでございます。

New Species of Oribatid Mites Described by J. Aoki



青木淳一

図 10 40 年間に発見した新種のササラダニ 285 種

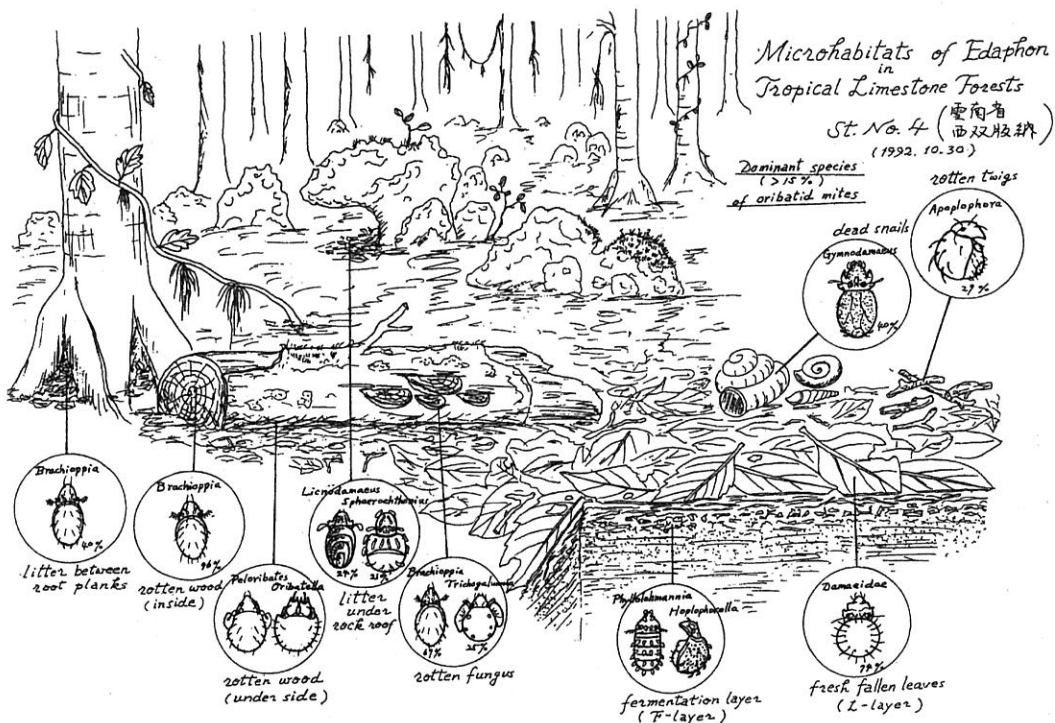


図 11 中国雲南省の熱帯林の中で行ったダニ調査

40 年間に記載したササラダニは 285 種

1つ1つ新種をご説明したいのですが、それをやると皆さん、眠ってしまうので、一遍に全部お見せしますと、これが私が40年間に記載したササラダニの新種、全部です(図10)。1つ1つ思い出がございましたけれども、どれでも指していただければ名前を申し上げます。どうしてこんな面白い形をした種類がたくさんいるのか。よほど造化の神が暇で、手なぐさみにいろいろな格好のものをつくったのではないかと思うほど面白い形をしております。

外国のササラダニもたくさん記載しました。これは中国の雲南省の西双版纳(シーサンパンナ)という熱帯林に最初に行った時でございますが、こんなふうに原生林の中にいろいろなものが落ちておまして、やはり榛名山でやったように林床の堆積物を別々に採ってまいりますと、それぞれ違うダニが住み着いているということがわかってまいりました(図11)。

インドネシアの例: アリの牧畜としてのダニ

たいへん面白かったのは、インドネシアで見つかった新科新属新種のダニです(図12)。ちょっと駄洒落ですけども、アリの巣の中から見つかったので *Aribates javensis* という名をつけました。

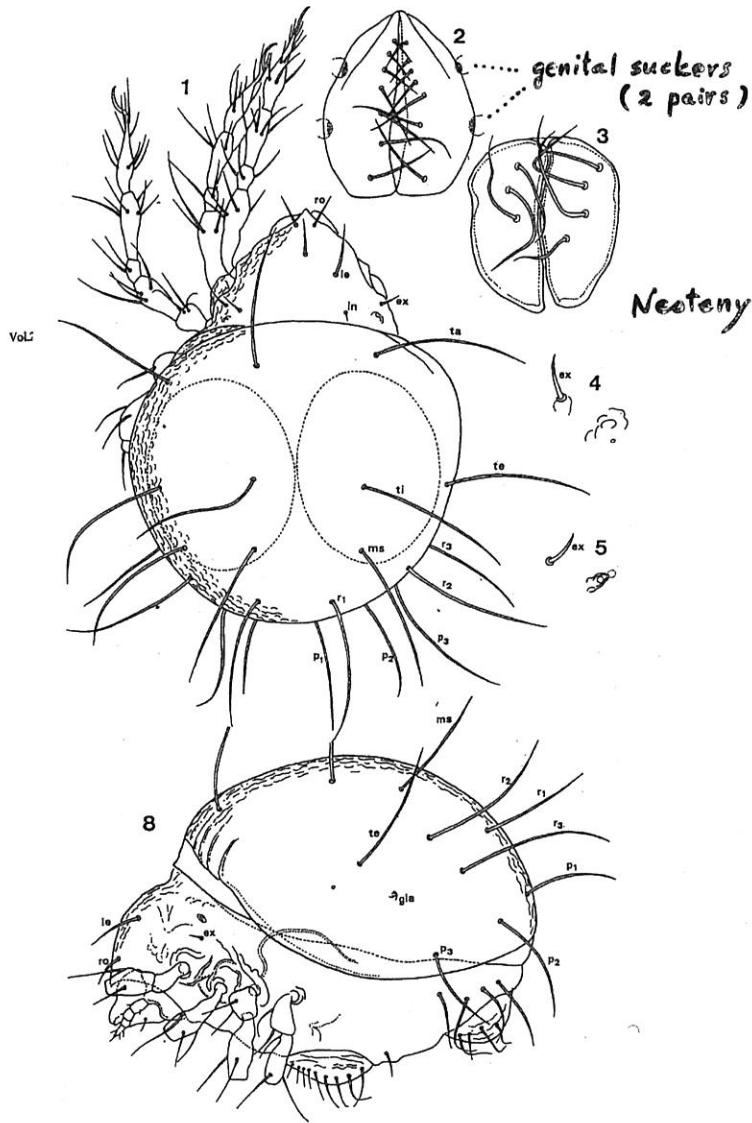


図 12 インドネシアのアリの巢中に共生するササラダニの一種

香川大学の伊藤文紀さんと2人で記載発表いたしました。このダニは、身体がプロポヨでして、非常に柔らかいのです。アリの巣の中に住んでいて、寝ころがっていて、自分では何もしない。アリが全部餌を運んでくれて、寝たきり老人みたいに身の周りの世話をしてくれるわけですね。卵を産む時も、お産婆さんの役をして、卵をアリが引っ張りだしてくれる。自分では産めない。何にもできないんですね。アリが一生懸命世話をしているのです。人間がこのアリの巣を壊すと、自分の子供をほっぽりだして、まずこのダニを、まあ船が沈没する時に一等船客から避難させるように、

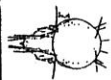








自然林	二次林	竹林	樹園地	草地
リキシダニ コノハツキノワダニ フトゲナガヒワダニ ヒロスツバダニ				
アラゲフリソデダニ ヨスジツバダニ ヤッコダニ				
	セスジジュズダニ ヨロイジュズダニ			
ヒメヘソイレコダニ ヤマトクモスケダニ コンボウイカダニ オオハラミソダニ		ヨーロッパツブダニ ヒョウタンイカダニ ハナヒラオニダニ		
		ナミツブダニ		
		マルタマゴダニ		
		クワガタダニ		
		コビゲツブダニ ヨツクボダニ コンボウオトヒメダニ		
			 ツクバハタケダニ ハバヒロオトヒメダニ サカモリコイダニ	

図 13 さまざまな環境適応幅を示すササラダニ類

アリがくわえて避難させる。アリが引越しをする時は、必ずこのダニを連れていくのです。では、ダニは保護してもらって、世話してもらっているけれども、アリのほうは何の利益があるのだろうかということ、伊藤さんが調べたら、意外なことがわかりました。ちょっとぞっとする話ですけども、いよいよ食べ物がなくなると、アリはこのダニを食うんですね。保存食だったんです。つまりアリは牧畜をやっていたわけです。我々人間が牧畜をやる前に、既にアリがダニを家畜として飼っていたということがわかったわけです。これは大変面白い発見でございました。

朝日新聞でも取り上げられ、「ダニを牧畜する新種のアリがいた」というので、新聞記事になったこともございました。

ところが最近、伊藤さんがもう1種類見つかったよと言って、やはりインドネシアから別のダニを送ってくれたんですね。これを見てみますと、やはり新種ですが、先ほどのダニと違って、ちゃんとササラダニらしい硬い体をしていますね。普通のササラダニの格好なんです。これがアリとどういう関係にあるかという、アリの巣の中を歩き回っております。自分で餌を食べています。

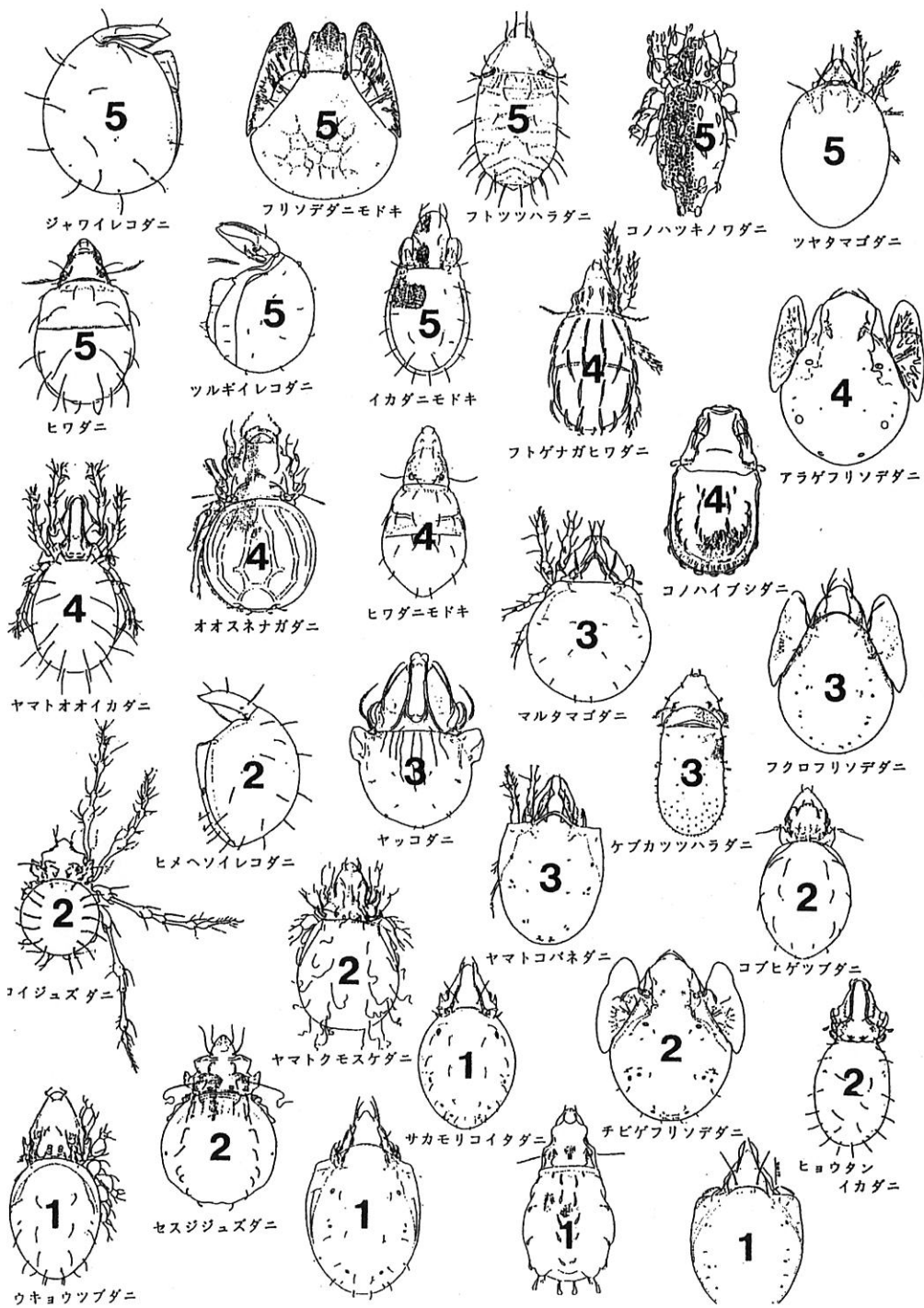


図 14 ササラダニ各種に1~5 点の点数をつけて環境を評価する試み

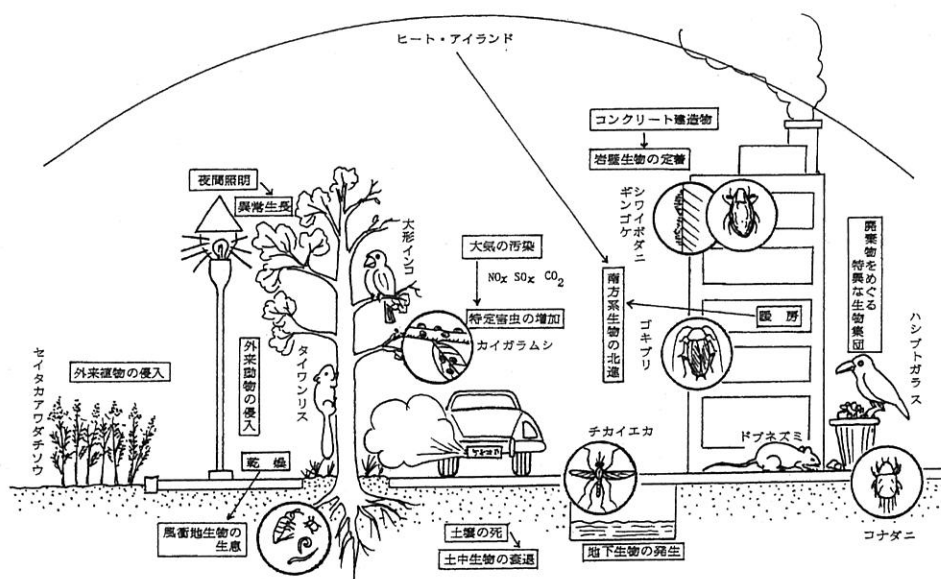


図 15 都市の生物群集の特徴

ところが、アリの巣から出て、どこかへ行こうとすると、アリが急いで追いかけてきて、巣へ連れ戻すのだそうです。だから、先ほどのダニほど密接な共生関係ではなくて、もっとゆるやかな関係ですね。ただ、どこかへ行こうとすると、連れ戻されるというのは非常に面白くて、これもどういう生活をしているか、これから伊藤さんと2人で調べようと思っております。これも、新種でしたので、*Protarribates myrmecophilus* と命名し伊藤さんと2人で記載したものでございます。

ダニを用いた環境診断

ダニの分類生態の話はそのくらいにいたしまして、先ほどちょっとご紹介の時にも触れていただきましたが、ダニを用いた環境診断を試みました。これで、私の首が横浜国大につながったわけです。なぜダニの研究者が、横浜国大にいるのかというのは、わからないわけですが、この話を聞いていただくとわかると思います。先ほど申しましたとおり、自然林から非常に人工的な影響の強い草地まで、いろいろなダニが住んでいます(図 13)。自然林の中にしかない非常にぜいたく者のダニもあります。雑木林までいるというダニもあります。俺たちは、どこでもいいのだというダニもあります。それから、人間が壊したところ、つまりゴルフ場とか、牧草地とか、そういうところが好きで、自然林は嫌だという変なやつもいるわけです。つまり種類によって好む環境、それから環境への適応幅が非常に違います。これは面白い。もしかしたら、環境の指標に使えるのではないかと思ったわけです。

自然林から都心に向かいますと、ダニの種類もだんだん変わってまいります。例えばヤドリダニ、ケダニは郊外から都心に向かって徐々に減ってまいります。ササラダニは、ガクンガクンと減って

まいます。ところが、皆さんの家庭にいる畳や食料品にわくコナダニは、都心に向かって増えてまいます。ホコリダニも増えてまいます。例えばササラダニとコナダニの比率をとったりすると、都市化の指標になるのではないかなどということも、考えられるわけですね。

そこで、非常に乱暴な話ですが、ダニに背番号をつけてしまいました(図14)。ダニを100種類選んで、点数をつけてしまう。5点のダニは、自然のいいところにしかいない。2点や1点は、悪いところにしかいない。3点、4点はその中間ということです。ある場所を調べて、どのダニが、どのくらい出てきたか。平均点を出します。そうすると、例えばいいところは4.2とか、悪いところは1.3とか、平均値が出ますね。それでもって、環境の自然性を評価しようということを考えてまして、今あちこちで使われ始めております。

都市の生物学の提唱

最後には、だんだん年とともに山に行くのがしんどくなりまして、都市のダニをやるようになりました。この都市生物というのがまた非常に面白い。都市というのは人間が人間のためにつくった生活空間でありますから、他の生物のことは一切考えていませんね。ただ、植物は緑のデザイン上、植えることはあるんですが、動物を植える人というのはいないのですね。動物を植えるというと、変ですけども…。私の考えでは、動物が植えられているのは、池の鯉だけだと思います。あとは、人間がつくった非常に悪い環境に勝手に住みついてくる生物がおります。

こんなふうにして、都市生物学という学問も成り立つのではないかと考えております(図15)。私の考えでは、都市生物は4つのカテゴリーに分けられる。1つは、暖地動物ですね。今、東京でクマゼミの声が聞こえますけれども、私の子供の頃には、絶対にいなかったんですね。沖縄、九州のほうから北のほうへクマゼミが北上してきております。ゴキブリも、もともと熱帯の生物であります。最近では北海道まで、とうとう渡りましたですね。これは、冷蔵庫の普及が原因だと私は思っています。冷蔵庫の裏の放熱板のところが、みんなが寝てしまっても温かいんですね。それで、ゴキブリが北に行けるようになったと、私は思っています。それからサソリモドキも、本州のあちこちで見つかるようになりました。

もう1つは、帰化動物ですね。これは、都市の温暖化というか、ヒートアイランド現象といひまして、都市は大体周りの郊外の温度より6度ぐらい平均、高いそうです。したがって、暖地動物が、都市では越冬できるということですね。熱帯性のワカケホンセイインコという鳥が、今、あちこちの大都市にすみついております。

三番目に、これは皆さんおわかりのとおりハシブトガラスとか、ゴキブリとか、ドブネズミ、コナダニですね。人間の廃棄物に依存する生物。ここまでは普通に言われているのですが、四番目に岩壁動物があります。これは、大変面白いです。最近、都市の中でイワツバメが増えていきます。それから、ドバトというのは、もともとはげ山の鳥なんです。植生のない岩場にすむカワラバトが改良されたのが、ドバトになったわけです。ドバトは原宿の駅前などでみえますと、砂利道やコン

クリート建築物のそばにたくさんおりますが、明治神宮の森の中には決して入っていきません。コンクリートが好きな生物です。それと同じように、例えばこのダニはシワイボダニというのですが、最初に私は渋谷の東急デパートの屋上で見つけたのです。それから面白くなって、全国の都市へ行くたびにデパートの屋上に駆け上がって、苔をとってまいりましたら、必ずこれが出てくるのです。他のどんなところを探してもいないのです。ビルの屋上、裾、それから歩道橋のステップ。気をつけてみますと、こういうところに苔がちょっとはえています。その下に土がちょっとあって、ダニがすんでいるのです。

それから、電車のプラットホームですね。皆さんが電車を待っている白線のあるところ。ここのコケは、簡単にとれますが、線路に飛び下りてとったら、えらい怒られました。「何するんですか!」と言うので、「苔がほしいんだ」と言ったら、「じゃあ、私に言ってください」と、駅員が帽子などを落とした時に拾う鋏で苔を拾ってくれました。それを中央線の東京駅から高尾駅まで、各駅停車で1駅ずつ降りて、とってきました。そうすると、大体8割くらいダニが出てくるんです。例えば横浜市の浅間町の歩道橋ですね。今度皆さん、気をつけてご覧になってください。こんなふうなステップのところに苔がはえています。土がわずかにたまっています。これは、もうあらゆる土壌の中で最悪の土壌ですね。これをスプーンでこすりとってきますと、こういうダニが出てまいります。これは、モンツキダニというダニです。

それから、これは東京の松阪屋の屋上のダニです。デパートの屋上にダニがいるなどというところ、お客さんが来なくなるかもしれません。これは、絶対にヒトの血を吸いませんからということで、松阪屋にも断ってあります。そのダニはシワイボダニと言います。このダニが日本中の都市を調べてみますと、面白いことに日本海側にいないのです。太平洋側にずうっとおります。この間、台北に行って調べたら、台北からも出てきました。どういうわけか、分布の境界が本州南岸線に一致しているのではないかと思います。都市にしかいないのです。それからこのサカモリコイタダニというダニも、都市にしかいない。ところが、最初から都市に住んでいるダニというのはあり得ないわけですから、こういったダニの故郷がどこかにあるはずだということで、都市のダニの故郷探しを始めました。そうしたら、サカモリコイタダニの故郷がわかったのです。とんでもないところだった。これは、壱岐の海岸風衝低木林、強い風が吹いて、土壌が乾燥して、痩せていて、木が大きくなれない。まさに都会の道路の中央分離帯の植栽と同じなのです。ここをこのダニは勘違いして、自分の故郷に非常に似ているということで、大都会の真ん中の道路植栽の下に住み着いたのですね。

そんなふうにして、何にも役に立たないと思って始めた研究なのですが、環境との結びつきを調べていくうちに、いろいろ応用できそうなことが出てまいりました。そんなわけで、私もこれからも、つまらない、くだらないダニの名づけ作業をずうっと続けていきたいと思っております。環境指標とするためには、名前がついていないと困るわけで、その点早くから名前をつけておいてよかったなというふう考えている次第です。

何とか腹痛も起きずに終わらして、ご清聴ありがとうございました。(拍手)

《動物系統分類学》完結はどのように報道・紹介されたか

発行日 2000年2月10日

発行所 麩中山書店

〒113-8666 東京都文京区白山1-25-14

Tel. 03-3813-1100

Fax. 03-3816-1015

URL:<http://www.nakayamashoten.co.jp/>

Published by Nakayama-Shoten Co., Ltd. Printed in Japan

非売品